

日本語の疑問付加部の構造的・意味的多様性

黒木 邦彦

1 はじめに

日本語の付加部 (adjunct) のうち、*nani* や *doo*¹ といった疑問語² を含むもの (以下「疑問付加部」) は、構造的にも意味的にも多様である。次のようなものまで含めると、それこそ枚挙に暇がない:

- (1) どの#くらい/程度, どんな#風=に, どんな#感じ=に/で, どんな#状態=に/で, { どんな / なん=の }#目的=で, なん=の#ため=に, なん=の#せい=で, なん=の#お陰=で, どの#よう=に#して, どんな#風=に#して, etc.

●=: 接語 (clitic) の境界; ●#: 語の境界; ●{ X / Y }: X ないし Y

ただし、<理由> を問う疑問付加部の多くは、次のように interrogative NP=*ni/de* (●NP: 名詞句) ないし疑問語を含む節に由来する:

- (2) a. *ika=ni/de* (中古和文語); *nan=de* (現代標準語; 以下「標準語」);
doo#sita#kocii //_{[NP [ADNCL doo#si-ta]#koto]=i}// (南海部方言); _{[NCL nani#se-m-u]=ni} (古代語) > *naze* (標準語; 大坪 1983)

b. _[ADVCL doo#si-te] (標準語); _[ADVCL nan#si-ke] > *naike* (甌島方言)

●[]: 句ないし節の境界; ●_{ADNCL}: 連体詞節; ●_{ADVCL}: 副詞節; ●_{NCL}: 名詞節;

●_{NP}: 名詞句

そして、語源に起因するのか、一部の疑問付加部に認められる用法の型は、次のようにある程度限定されている:

(3) 中古和文語

a. 天竺に 二と 無き 鉢を 百千萬里の 程 行きたりとも いかでか
取るべき? (竹取: 34) <方法>

b. 「かうまでも いかで 聞えじ」と 思へど 「上の 御心に 背く」
と 聞こし召すらむ ことの 安からず いぶせきを 「ここにだにも
聞え知らせでやは」とて なん。 (源氏, 若菜下: [16] 406) <理由>

(4) 標準語

A: この 料理は なんで 作ったの?

¹ 複数の日本語方言から抽象した音素はイタリック体ローマ字で表記する。

² 告知の段階では、大鹿 (1991) に倣い、不定語としていた。しかし、これらの語は *=mo* や *=ka* を取らなければ、疑問文を作るので、疑問語と呼ぶのがふさわしいように思う。

- B: { この 鍋で / 鶏肉で }。 <道具; 材料>
 { 出来心で / 喜ぶと 思って / 食べたかったから }。 <理由>

そこで、本発表では、構造と意味の両面から日本語の疑問付加部の多様性を示すと共に、そこから抽出される一般性も併せて指摘する。

なお、(1) に挙げた付加部のように、構成要素から意味・用法が容易に理解できるものは、本発表では極力取り上げない³。

2 日本語諸方言⁴の疑問付加部の構造と意味

2.1 中古和文語

中古和文語 (調査は『日本古典文学大系』(岩波書店) のテキスト データで行なった) の疑問付加部を構造の面から分類すると、次のようになる:

- (5) a. 語: nado, nadehu⁵ (< [NCL nani=to#ih-u])
 b. 句: ika=ni, ika=de, nani=ni=te, [NCL nani#si-Ø]=ni (or [ADVCL nani#si-ni])
 c. 節: なし

それぞれの用法は次のとおり:

- (6) 答へも せで ゐたるを ((男)) 「など 答へも せぬ」と 言へば ((女))
 「涙の 零るるに 目も 見えず 物も 言はれず」と 言ふ。
 (伊勢, 62: 145) <理由>
- (7) ((落窪)) 「今日 明日 御物忌に 侍る」と 答ふれば ((北の方)) 「あら ことごとし。 なでふ 我が 家など なき 所にて 御物忌 侍る」と 宣へば
 (落窪, 1: 79) <理由>

³ 疑問付加部相当の意味を語用論的に表す、次のような形式 (例は上甕島里方言) も除外する:

- (I) A: 何ば ^{なん}そが^{いせ}ん 急^{いせ}いで 行きよいやいと?
 ‘何をそんなに急いでらっしゃるの? ≒何でそんなに急いでらっしゃるの?’
 B: 息子がなあ ^{おぶ}重^{おぶ}か 病気で 死んかかいよい。
 ‘息子がなあ、重い病気で死にかかっている’
- (II) A: こん ^{さわ}騒^{なん}ごお^{なん}ば 何の ことか?
 ‘この騒ぎようは何だ? ≒この騒ぎようは何?’
 B: 今 ^{まい}鞠^{まい}を 打^{まい}つお^{まい}った 子の 死んで あが^{まい}ん 騒^{まい}ぐたい。
 ‘今、鞠を突いてた子が死んで、あんなに騒いでるんだ’

⁴ 各方言の資料の出典および提供者については本稿末の「資料」を参照。

⁵ *h* (いわゆるハ行子音) に当たる中古和文語の音素は、当方言の音価を考慮して、*f* で表記すべきかも知れない。ただし、音素表記に用いる記号は何でも (それこそ数字でも) 良く、その上、本発表では時代的・地理的方言を複数取り上げるので、各方言における音価を無視して、*h* に当たる音素は *h* で表記する。

- (8) a. 「いかに 近からむ」と 思ひつるを されど け遠かりけり。
(源氏, 帚木: [14] 93) <程度>
- b. ((その女は)) 上にも 聞し召しおきて 「((その女を)) 宮仕へに 出だしたてん」と 漏らし奏せし 「((その女は)) いかに なりにけん」と いつぞや 宣はせし。
(源氏, 帚木: [14] 91-92) <状態>
- c. かの 人も 「いかに 思ふらん」と いとほしけれど
(源氏, 空蟬: [14] 119-20) <内容>
- d. 君は 「いかに 謀りなさむ」と まだ 幼きを 後めたく 待ち臥し 給へるに ((小君が)) 不用なる由を 聞こゆれば
(源氏, 帚木: [14] 105) <方法>
- e. ((父)) 「いかに かく 籠りおはします。 ((中略))」。少將 「あな かしこ。 何か つきなき ことも 侍らず。 日頃 乱り心地の 例にも 似ず 侍れば 内裏の 方にも 参らで 籠り侍るなり」。
(うつほ, 嵯峨院: [10] 255) <理由>
- (9) a. 天竺に 二と 無き 鉢を 百千萬里の 程 行きたりとも いかでか 取るべき?
(竹取: 34) <方法>
- b. 「かうまでも いかで 聞えじ」と 思へど 「上の 御心に 背く」と 聞こし召すらむ ことの 安からず いぶせきを 「ここにだにも 聞え知らせでやは」とて なん。
(源氏, 若菜下: [16] 406) <理由>
- (10) a. 手 なくば 何にてか 木の 実 葛の 根をも 掘らん。
(うつほ, 俊蔭: [10] 80) <道具>
- b. 衛門 「三郎君と 聞こえしは 今は 何にてか おはすらむ? 御冠 や し給へる?」 ((侍従の君)) 「しかじか この 春なん 大夫と 言ふめる」
(落窪, 3: 181) <資格>
- (11) a. ((童)) 「何しに この山には 有るぞ」と 問へば ((俊陰)) 「魚釣りに 來つるぞ。 御許に 食はせ奉らんとて」と 言へば
(うつほ, 俊陰: [10] 77) <目的>
- b. ((かぐや姫)) 「ここに 心にも あらで かく 罷るに 昇らんを だに見送り給へ」と 言へども ((翁)) 「何しに 悲しきに 見送り奉らん。 我を いかに せよとて 捨てては 昇り給ふぞ。 具して 出おはせぬ」と 泣きて 伏せれば 心惑ひぬ。
(竹取: 64) <理由>
- (10) のとおり, <材料> を問う nani=ni=te の例は見当たらない。しかし, N=ni=te が次のように <材料> を表すことから, nani=ni=te も同様であると考えられる:
- (12) 御返しも その 色の 紙にて 御前の 花を 折らせ給ひて 付けさせ給ふ。
(源氏, 梅枝: [16] 162) <材料>

『日本古典文学大系』のテキスト データを調べた限り⁶, <目的> を問う nado, nadehu, ika=ni, ika=de は見当たらなかった。

表 1 中古和文語の疑問付加部の用法

	ika=ni	ika=de	nani=ni=te	nani# si-Ø=ni	nado	nadehu
程度, 状態, 内容	✓					
方法	✓	✓				
道具, 材料, 資格			✓			
目的				✓		
理由	✓	✓		✓	✓	✓

2.2 標準語

標準語の疑問付加部を構造の面から分類すると、次のようになる:

- (13) a. 語: doo, naze
 b. 句: naN=de (cf. ika=ni, doNna=ni)
 c. 節: [ADVCL nani#si-ni], [ADVCL doo#si-te], [ADVCL doo#jaQ-te]

発表者の内省に拠れば、標準語では、疑問付加部 (13) を用いた質問文に対して、次のように答えると思われる:

- (14) a. A: 酒を 飲むと どう なるの?
 B: { 元気に / 顔が 赤く } なるの。 <状態>
 b. A: 研究発表の 前に 酒 飲むって どう 思う?
 B: 普通の ことだと 思うけど。 <内容>
 c. A: この 料理は どう (cf. どう やって) 作ったの?
 B: 『美味しんぼ』を 見て。 <方法⁷>

⁶ 調査にあたっては、次の作業を行なった:

- (III) a. 本稿末の「資料」に挙げる中古和文語のテキスト ファイルを「秀丸エディタ」(URL: <http://hide.maruo.co.jp/software/hidemaru.html>) で開く。
 b. 所望の形式を検出するため、次の正規表現で grep を実行する:
 [きぎしちひびみりけげせぜてでねへべめれ](行|来|来|参|参|まる)

⁷ (-r)-eba 節内では <方法> を問う doo の許容度が上がるように感じる:

- (IV) a. [どう 作れば] 良いの? <方法>
 b. [どう 作れば] 良いか 分からない。 <方法>

- (15) A: そんな ところに なぜ 行くの?
 B: { ちょっと 旅行に/で / 魚を 釣りに / 興味本位で / 珍しい 魚が
 いるから }。 <目的; 理由>
- (16) a. A: この 料理は なんで 作ったの?
 B: { この 鍋で / 鶏肉で / 出来心で / 喜ぶと 思ったから }。
 <道具; 材料; 理由>
- b. A: そんな ところに なんで 行くの?
 B: { 電車と バスで / ちょっと 旅行に/で / 魚を 釣りに / 興味
 本位で / 珍しい 魚が いるから }。 <道具; 目的; 理由>
- (17) A: そんな ところに 何 しに 行くの?
 B: { ちょっと 旅行に/で / 魚を 釣りに / 興味本位で / 珍しい 魚が
 いるから }。 <目的; 理由>
- (18) A: そんな ところに どうして 行くの?
 B: { ちょっと 旅行に/で / 魚を 釣りに / 興味本位で / 珍しい 魚が
 いるから }。 <目的; 理由>
- (19) A: この 料理は どう やって 作ったの?
 B: { 『美味しんぼ』を 見て / この 鍋で }。 <方法; 道具>

表 2 標準語の疑問付加部の用法

	doo	doo# jaQ-te	naN=de	naze	nani# si-ni	doo# si-te
状態, 内容	✓					
方法	✓	✓				
道具		✓	✓			
材料			✓			
目的, 理由			✓	✓	✓	✓

2.3 九州方言

2.3.1 日田方言

- (20) a. 語: dogee, nasi(k/te) (< [ADVCL naN#si-k/te])
 b. 句: naN=de
 c. 節: [ADVCL naN#si-ni], [ADVCL dogee#si-te]
 ●(X): X は選択要素 (e.g. nasi(k/te) = nasi, nasike, or nasite)

表 3 日田方言の疑問付加部の用法

	dogee	dogee #si-te	naN=de	nasi{ ^{ke} / ^{te} }	naN#si-ni
程度, 状態, 内容	✓				
方法	✓	✓			
道具		✓	✓		
材料			✓		
目的, 理由		✓		✓	✓

2.3.2 南海部方言

- (21) a. 語: dogee, dogeite (< [ADVCL dogee#site])
 b. 句: nani=i, naN=de, doo#sita#kocii // [NP [ADNCL doo#sita]#koto]=i//
 c. 節: [ADVCL naN#si-ni], [ADVCL naN=zja=ki]

表 4 南海部方言の疑問付加部の用法

	dogee	dogeite	nani=i	naN=de	doo#sita #kocii	naN#si-ni	naN=zja=ki
程度, 状態, 内容	✓						
方法	✓	✓	✓				
道具, 材料				✓			
目的, 理由				✓	✓	✓	✓

2.3.3 飯島方言

- (22) a. 語: dogeN, naike (< [ADVCL naN#si-ke])
 b. 句: naN=de
 c. 節: [ADVCL naN#si-ke], [ADVCL dogeN#si-te]

表 5 甌島方言の疑問付加部の用法

	<i>dogeN</i>	<i>dogeN# si-te</i>	<i>naN=de</i>	<i>naN# si-ke</i>	<i>naike</i>
程度, 状態, 内容	✓				
方法	✓	✓			
道具, 材料			✓		
目的, 理由				✓	✓

3 考察

3.1 <方法> > <理由>

<理由> を問う疑問付加部のうち, (i) 中古和文語の *ika=ni* と *ika=de*, (ii) 標準語の *doo#si-te*, (iii) 日田方言の *dogee#si-te* は, <方法> を問う形式に由来する。これらのうち, 標準語の *doo#si-te* と *nasite* (<*naN#si-te*>) は <方法> 用法を失い, <目的; 理由> を問うものに移行している。

3.2 <目的> > <理由>

<理由> を問う疑問付加部のうち, (i) 中古和文語の *nani#si-Ø=ni*, (ii) 標準語の *nani#si-ni*, (iii) 日田方言の *nasike* (<*naN#si-ke*>), (iv) 南海部方言の *naN#si-ni*, (v) 甌島方言の *naike* (<*naN#si-ke*>) は, <目的> を問う形式に由来する。

3.3 副詞節から副詞へ

標準語の *doo#si-te*, 九州方言の *dogee#V*, 日本語一般の *nani#si-ni* は見かけの上では副詞節であるが, 補部も付加部も取らない。日田方言の *nasike/te*, 南海部方言の *dogeite*, 甌島方言の *naike* は一歩進んで, 語境界までも曖昧になっている。

これらの変化は, 日本語でしばしば起こる副詞節から副詞への変化に通じる:

- (23) a. [ADVCL *ahe-te*] > [ADV *aete*] (cf. **ae-zu*, **ae-ro*, **ae-r-u*, **ae-r-eba*, etc.)
 b. [ADVCL *tatoh-eba*] > [ADV *tatoeba*] (cf. *tato-u=beku*; **tatow-a-zu*, **tatoe*, **tatoQ-te*, etc.)

- (24) [CL [ADVCL VBL] (...) VBL]

↓

[CL ADV (...) VBL]

●=: ADV: 副詞; ●CL: 節; ●VBL: 用言

4 今後の展望

- (25) a. <程度; 状態; 内容> と <方法; 理由> を具有する *ika=ni* 型疑問付加部の希少性の究明。
b. <理由> を問う疑問付加部の発生経路の究明。
c. 標準語化に拠る *naN=de* 大勝利の予感。

資料

中古和文語: 国文学研究資料館が web 上で公開している「日本古典文学本文データ ベース」(=『日本古典文学大系』の電子版; URL: http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi) の中の「タグ無し・傍記無し」のテキスト ファイル

日田方言: 2013 年に行なった面接調査で得た資料。被調査者は 1920 年代生まれの男性 1 名, 1930 年代生まれの男性 2 名, 1940 年代生まれの男性 1 名。

南海部方言: 2013 年に行なった面接調査と談話収録で得た資料。被調査者は 1930 年代生まれの男性 3 名, 1940 年代生まれの男性 1 名。

甕島方言: 2010–13 年に行なった面接調査 (ただし, 疑問付加部に特化したものではない) と談話収録で得た資料と, 次の文献から得た資料。被調査者は 1920–50 年代生まれの男女 20 名以上:

- 荒木 博之 (編) (1970)『甕島の昔話』, 三弥井書店; ●池山 一美 (1991)『ふるさとことば—方言集—』, 私家版; ●小川 辰雄 (2012)『さとことば (里方言)』, 南勢出版; ●上甕村郷土史編纂委員会 (編) (1960)『上甕村郷土史』, 上甕村; ●上村 孝二 (1941)「甕島方言文例」, 『九大國文學會誌』 17, pp. 38–52, 九州帝國大學國文學研究室; ●里村教育委員会 (2003)『郷土の民話』, 私家版; ●里村郷土史編纂委員会 (編) (1985)『里村郷土史』, 里村

参考文献

大鹿 薫久 (1991)「萬葉集における不定語と不定の疑問」, 『国語学』 165, pp. 53–66, 国語学会

大坪 併治 (1983)「漢文訓読文におけるナゼニの成立をめぐって」, 『国語学』 132, pp. 1–10, 国語学会

くろき くにひこ (啓明大学校人文大学日本語文学科助教授)

E-mail: nihon5_no_ken9@yahoo.co.jp

HP: <http://hotarugaikengokenkyuuzyo.web.fc2.com/>